

資 料

看護学生が基本的なコミュニケーション技法のロールプレイを通じて得た人間関係に関する気づき

What nursing students noticed about human relations through role playing focused on the basic communication skills

富田 幸江, 天野 雅美

Sachie Tomita, Masami Amano

キーワード：基礎看護技術演習, 看護学生, コミュニケーション, 基本的姿勢, 人間関係

Key words : demonstration of fundamental nursing skill, nursing student, communication, human relations

要 旨

本研究の目的は、看護学生がロールプレイを通じて得た人間関係に関する気づきについて明らかにすることである。演習は看護系短期大学（3年課程）1年生42名を対象に、コミュニケーションの基本的姿勢（傾聴・共感・受容・尊重・誠実さ）の意識化を目指して展開された。分析対象は、授業終了時に学生に配布した、研究者ら独自の質問紙への記載内容（自由記述）である。分析方法としては、記述内容をコード化して類似内容毎にカテゴリ化し、さらに、各カテゴリのコードにおいて、看護師役を担った学生が患者役の学生との関係性の中で「気づいた内容」を取り出した。その結果、学生は、相手の話を聴くことや共感することが対象理解につながることで、相手の思いに立つことが信頼関係につながることで、声をかけることが相互関係につながることで気づきを得ていたことがうかがえた。コミュニケーション能力を高める場を想定した学習方法として、学生同士のロールプレイを学内演習に組み入れていく有用性が示唆された。

I. はじめに

看護は「人間対人間の関係を確立することを通して達成される」（トラベルビー, 長谷川訳, 1974）ということであるなら、看護を学ぶ学生が看護の対象である患者との人間関係を築きながら看護を提供していくために、看護基礎教育を通して学ばなければならない。そのためには、人間関係を学ぶ実習は重要な学習の場である。しかし、看護学生（以下学生）を取り巻く看護教育の環境は、医療の高度化による看護業務の複雑・多様化や患者の在院期間の短縮等、学生の実習範囲や機会が限定され、学生にとって実習が困難な状況がみられる。

さらに、現代学生の特性については、基本的な生活能力や常識、学力等の変化、コミュニケーション能力の不足などを指摘し、学生自身、患者と関わる上での問題を提起している（厚生労働省, 2007; 太田, 2007）。そのため、2009年4月に予定されているカリキュラム改正に当たって、基礎分野に「コミュニケーション能力」を高めることを教育内容の充実の一つとしてあげられている。

この状況を踏まえ、看護基礎教育においては、看護に関する基礎的な知識・技術・態度を学生が主体的に身につけることができるよう、教育内容や方法を工夫していかなければならない。対象を理解し関係性を築くことが

看護の達成に重要な意味があるので、コミュニケーション能力を高める学習方法は、実習に限らず学内の授業において、具体的に学べるよう教授方法を充実していくことを求められる。

入学した学生が、看護専門領域の学習として最初に学ぶ科目は、基礎看護学概論、基礎看護技術（以下看護技術）である。看護技術の授業では、学生同士、患者役・看護師役になり、ロールプレイによる看護技術を練習する。その結果、その場を通して、患者役とのコミュニケーション技術や人間関係についても学ぶことになる。

そこで、今回、基礎看護技術演習（以下学内演習）時のロールプレイを通して、学生が学んだ人間関係に関する気づきについて明らかにしたのでここに報告する。

II. 研究目的

コミュニケーションの基本的姿勢を意識して取り組んだ基礎看護技術演習の中で、看護師役が学生がロールプレイを通じて得た人間関係に関する気づきを明らかにする。

<用語の定義>

コミュニケーションにおける基本的姿勢とは

看護師が患者との人間関係を形成していく上でのコミュニケーションの要素として、患者の心を開く上で大切な、「傾聴」「共感」「受容」、そして信頼関係に影響する「誠実さ」、援助的な姿勢を示す「尊重」としている（村中、2001）。

本研究では、これらコミュニケーションの要素を看護師が患者との人間関係を形成していくためのコミュニケーションの基本的姿勢とした。

III. 対象と方法

1. 対象：看護系短大1年生 42名

2. 基礎看護技術の単元「コミュニケーション」における要素としての基本的姿勢に関する授業概要と方法

1) 「コミュニケーション」（12時間）において、コミュニケーションの基本的姿勢に関する授業は、講義2時間、演習4時間の計6時間を使用した。

2) 演習では、コミュニケーションの基本的姿勢である、傾聴、共感、受容、尊重、誠実さを意識し、学生自身の悩みなどについて、2人1組になり、自由に話し合い聴くことを体験した。

3) 上記について話し合った一部分を学生が選択し、ロールプレイを実施する。その後、ロールプレイした内容を再構成用紙に記載した。再構成したものから、他者との

かわり方について、コミュニケーションの基本的姿勢の視点に沿って振り返り、その内容をレポート（A4 1枚程度）にまとめた。

また、清拭、口腔ケア、足浴、採血（モデル人形）、筋肉内注射（モデル人形）導尿（モデル人形）における学内演習終了時に、演習内容の振り返りの一つとして、コミュニケーションの基本的姿勢について、学内演習で気づいたり、学べたことを記録（A4 半分）した。

3. 学内における基礎看護技術の教授法の考え方

学内で習得する看護技術において、単なる手順や方法など、その根拠を学習するだけでなく、看護師役・患者役の役割演技によるコミュニケーションを通して、患者役を理解し、患者役と人間関係を築きながら、安全、安楽、自立を考慮した技術を習得することを目的としている。

4. 研究方法

1) 方法：質問紙調査

2) 調査時期：1学年後期、最終の学内演習終了時

3) データ収集方法

調査内容：学内演習を通して、患者役・看護師役の関係性の中で学びについて、質問紙調査を実施した。

(1) 看護師役として、コミュニケーションの基本的姿勢を意識し、患者役の学生に関わったかについて、5段階尺度（大変意識した、意識した、少し意識した、あまり意識しなかった、意識しなかった）で回答を求めた。

(2) 「大変意識した」、「意識した」者を対象に、学内演習時、コミュニケーションの基本的姿勢を意識し取り組んだことによって、看護師役として患者役との人間関係に関する気づきについて、自由記述式により回答を求めた。

4) データ分析方法：

(1) 5段階尺度で回答を求めたものは、単純集計を実施した。

(2) 記述式による回答はコード化し、内容分析を実施した。なお、記述内容のコード化のルールは、1意味1内容とした。コード化したものについて、類似内容に分類し、カテゴリ化を実施した。さらに、各カテゴリのコードにおいて、看護師役が患者役との人間関係で、「気づいた内容」を取り出した。

分析の妥当性を図るために、コード化と分類、学生が「気づいた内容」の抽出に際しては、研究者2名がその内容について複数の検討を重ねた。

5. 倫理的配慮

学生に、研究の主旨、データの秘密厳守、研究以外に使用しないこと、研究同意の有無により成績には影響しないことを説明した。また、提出は回収ボックスを設け、

自由意志により無記名で提出できるようにした。提出のあった者のみ研究への同意が得られたものとした。

学内での技術演習時、看護師役として患者役にかかわる際、コミュニケーションの基本的姿勢を意識し関ったかについて、5段階尺度で回答を求めた結果、「大変意識した」3名(7.9%)、「意識した」25名(65.8%)、「少し意識した」6名(15.8%)、「あまり意識しなかった」4名(10.5%)、「意識しなかった」0名であった。「大変意識した」、「意識した」を合わせると28名(73.7%)であった。

IV. 結果

調査の回収率は、38名、90.5%であった。

1. ロールプレイング時のコミュニケーションの基本的姿勢の意識について

表1. 学内演習での学び

n = 46

カテゴリ	コード
話を聴くことの意味	・対象がどのようなことを望んでいるのか、相手の立場になって考えてみないとわからないことが、対象と同じ目線で話を聴き、考えることで、わかるようになった。
	・患者は自分が行なっていることに対して、どう思っているか、また、対象自身の状態を聴く事で、対象が望む援助を、まだ不十分であるができたと思う。
	・正直、演習ということで、基本的態度をあまり意識していなかった部分もあるが、きちんと傾聴することで、対象を理解することができる。
	・きちんと傾聴することで、対象も私に段々と心を開いてくれていたことがわかり、距離が近くなった気がした。
	・まず、真剣に話を聴くことで、その後また頼りにしてくれて話しかける回数が増えた。
	・多くの人が話を聴かないで、自分ばかり話す傾向にあるが、そんな時に、傾聴の心を思いだしたら、相手の話しを自ら聴くことによって、相手もまた、自分の話しを聴いてくれるようになった。
	・演習時、対象の痛みの有無や訴えを聞くことで、対象のことを常に考えられるようになってきたと思う。
	・処置の前に患者役の人の状態を聴くようにしたら、今は体調が悪いとか、自分の不安な状況など話してもらえたので、それに特に気を遣って接することができた。
	・お互い技術練習時、友達同士でアドバイスも出て、傾聴できたと思う。
	・まず、真剣に話を聴くことで、話しかける回数が増え、うれしかった。
共感することの意味	・共感しない看護師に注射された時、患者さんを人ではなく物として捉えているような気がして怖いし、余計に不安や恐怖を感じてしまう。
	・共感することで、話す内容があちらこちらから出てきて、演習の時はコミュニケーションがうまくとれた。
	・最初は話づらい相手であったが、共感しあうことにより、結構、話しができるようになった。
	・患者役の学生とはあまり面識がなく、どちらも気を使った様子だったが、患者役の今感じる気持ちを共感したことから、足浴の時は笑いごとで、口腔ケアの時は唾液を出すのに一緒に苦しんだりして、関係が近づけたように感じた。
	・自分の入院経験から、ベッドの上で、看護師役に自分の気持ちなど共感してもらえることで、安心を感じることができた。
	・足浴などの演習では、いろんなことを話しながら、また共感しながら実施した基本的態度を用いることで、お互いリラックスしながら笑顔で過ごせたと思う。
	・共感することで雰囲気が和んだ。
・注射など痛みを共感することで、患者さんが少し安心する。	
相手の思いに立つことの意味	・対象の話の中に沢山の要素が含まれているので、確かにそうすればきっとこの人にとって安全・安楽になるだろうとか、こんな事を感じているんだ・・・と自分は今迄、配慮が足りない部分があったかもしれないと思う事で、お互い関係が取れた。
	・技術演習をしている時、患者役が嫌な思いをしていないか、もっと良い方法はないかなど考えながら実施できた。
	・筋肉内注射や臀部を露出する排泄、口腔ケアでは、恥ずかしいという気持ちがとても強く、ちょっとした配慮が大切だと思った。
	・自分自身もその立場で、相手の気持ちを考えることで、自分がどうして欲しいのか、逆にどのようなことをされたくないのか、理解でき、共感できるようになった。
	・患者役が体験するのがつらいという状態の時、自分なら嫌だと思ふことをしないようにしたことで、相手も嫌な思いを少しは軽減できたように思う。
	・体位がつかかったり、痛みが生じてしまったりした場合、それを取り除くように行動できた。
	・体位がつかかったり、痛みが生じてしまったりした場合、どのようにすれば安楽になるのか勉強になった。
声かけの意味	・演習時の声かけは、患者さんとコミュニケーションが取れるということがわかった。
	・口腔ケアの歯磨きの演習で、相手の友人が早く処置をするように促したので、早く処置をするようにしたが、ケア後のねぎらいの言葉をかけたとき、落ち着いた感じであった。
	・導尿の演習の際、羞恥心が伴うため、「つらいですね、もう少しですよ」など、声かけをすると、対象は力が抜けて穏やかになっていったのがわかった。
	・技術チェックの時、お互い緊張し、黙っているだけでもすごく不安になったので、声かけだけでも相手をリラックスさせることができる。
	・処置に対しても、患者の気持ちを考え、ねぎらいの言葉をかけると患者の気持ちは楽になるという声かけの大切さがよくわかった。
・声かけは、痛みを最小限にするということがわかった。	

患者役から話してもらうことの意味	・清拭の演習時、「あったかい」などの素直な感想を聞くと、この位がいいんだとか、学生(看護者役)もすこし緊張がほぐれたりもした。
	・相手が今どんな気分なのかを知ることができるので、自分が次に何を言うべきか、するべきかがわかり、また、相手の次の行動が予測できるので、そんなに慌てずに行動できた。
	・技術演習をしている時など、患者役の人が嫌な思いをしていないか、意見を言ってもらいながら実施できた。
	・自分が気づけなかったことを言われて、「あっそうか」と学んだことがあった。
	・演習時この看護者の基本的姿勢があれば、患者役の人もきっとそう感じていてくれると思うと私の中ですごくうれしかった。
	・身体の状態を少し話してくれるようになった。
相互関係の持つ意味	・ただの業務的な流れではなく、一つのコミュニケーションの場となった。一方的に告げるのとは違い、状態を詳しく話してくれたり、自分の今の気持ちとか、最近の出来事を話してくれた。
	・演習時最初は緊張した様子でお互い関わっていたが、お互い話しを聴きあうことによって、痒いところはどこか、こうして欲しいなどと言えるようになった。
患者役になってみて感じたことの意味	・体験してわかったことを、自分が看護者になった時に対象者にも考えて援助ができた。
	・患者役になった時、看護者にやってほしいこと、やって欲しくないことが初めて分かった。
	・トイレなど言いにくいことや体調などを話す不安だったりした気持ちが、声に出すことで、少しは緊張もほぐれる。
看護師の基本的姿勢が学生の日常生活へ活用していることの意味	・清潔ケアや排泄ケアなど他人の前で、肌や陰部など露出するということが、いかに恥ずかしいことであるか、患者に不安な思いをさせるか理解できた。
	・普段話をしたことのない人とも、実際、打ち解けたりできた。
	・学内においても日常的にも話をするようになった。
看護者の基本的姿勢が学生の日常生活へ活用していることの意味	・学内では今まで挨拶程度しか接点がなかった人とも、傾聴するという態度で接したことで、よく話をするようになった。

*下線部分は、研究者らが、学生の「人間関係に関する気づき」と捉えた内容である。

2. 記述内容のカテゴリ化の結果

学内演習において、コミュニケーションの基本的姿勢を「大変意識した」「意識した」28名の学生の記述内容をカテゴリ化した結果は表1の通りであった。抽出されたコード総数は46であり、8カテゴリに分類できた。以下カテゴリは【 】、学生の気づきの内容は『 』で表記した。

一つ目のカテゴリは、【話しを聴くことの意味】であり、コード数は10であった。代表コードからみた気づきの内容では、話しを聴くことによって、『相手の立場がわかること』『対象を理解することができた』『対象のことが常に考えられる』『段々と心が開いてくれていることがわかり、距離が近くなった気がした』『頼りにしてくれている』『話しかける回数が増えてうれしかった』などであった。

二つ目のカテゴリは【共感することの意味】であり、コード数は8であった。代表コードからみた気づきの内容では、共感することによって、『安心する』『コミュニケーションがうまくとれる』『患者役との関係が近づけた』『お互いリラックスできた』などであった。

三つ目のカテゴリでは、【相手の思いに立つことの意味】であり、コード数は7であった。代表コードからみた気づきの内容では、相手の思いに立つことによって、『お互い関係がとれた』『もっと良い方法はないかなど考えられた』『どのようなことがされたくないのか理解でき、共感できるようになった』『痛みを取り除くよう行動できた』などであった。

四つ目のカテゴリは、【声かけの意味】であり、コード数は6であった。代表コードからみた気づきの内容で

は、声かけによって、『患者役とコミュニケーションがとれる』『ケア後ねぎらいの言葉をかけたとき、落ち着いた感じであった』『対象は力が抜けて穏やかになっていった』『声かけだけでも相手をリラックスできる』『患者の気持ちが楽になる』『痛みを最小限にする』であった。

五つ目のカテゴリは、【患者役から話してもらうことの意味】であり、コード数は7であった。代表コードからみた気づきの内容では、『看護師役も少し緊張がほぐれる』『相手の次の行動が予測でき、そんなに慌てずに行動できる』『嫌な思いをしていないか意見を言ってもらいながら実施できる』『気づけなかったことをいわれて‘あっそうか’と学んだ』などであった。

六つ目のカテゴリは、【相互関係の持つ意味】であり、コード数は2であった。コードからみた気づきの内容では、『お互い話しを聴きあうことによって、こうして欲しいことなどいえるようになった』などであった。

七つ目のカテゴリは、【患者役になってみて感じたことの意味】であり、コード数は4であった。コードからみた気づきの内容では、『看護者になった時に対象にも考えて援助ができた』『看護者にやってほしいこと、やって欲しくないことが初めて分かった』などであった。

八つ目のカテゴリは、【コミュニケーションの基本的姿勢が学生の日常生活へ活用していることの意味】であり、コード数は3であった。代表コードからみた気づきの内容では、コミュニケーションの基本的姿勢を意識することによって、『普段話していない人とも実際、打ち解けたりできた』、学内で挨拶程度しかなかった人とも『よく話しをするようになった』などであった。

各カテゴリとコミュニケーションの基本的姿勢の視点

との関連をみると、患者の心を開く上で大切な【話を聴くことの意味】(傾聴)と【共感することの意味】(共感)、そして、信頼関係に影響する「誠実さ」や援助的な姿勢を示す「尊重」として【相手の思いに立つことの意味】など、人間関係に関する気づきとしてあげられた。さらに、これらの基本的姿勢をとることから、患者役に【声かけの意味】が実感でき、患者役との人間関係のあり方として、【患者役から話してもらうことの意味】や【相互関係の持つ意味】などの気づきがみられた。

V. 考察

1. 学内演習で看護師役が捉えた人間関係に関する気づき

学内演習では、学生同士が患者役・看護師役になり、役割演技による直接的な触れ合いを通して学習している。しかし、学生同士であるため、緊張感をあまり持たずに展開していくこともある。演習中のコミュニケーションでは、普段の友達同士の言葉づかいになってしまったり、看護師役が実施した不快な看護技術に対しても、遠慮が入り看護師役の学生に苦痛をはっきりと言えなかったりする場合もある。このような状況を改善するために、学内演習時に看護師役は、看護技術を一方的に練習するのではなく、コミュニケーションの基本的姿勢を意識し、患者役の気持ちを理解したこと。そして、患者役の立場に立った看護技術を体験するように働きかけている。その結果、7割以上の学生がコミュニケーションの基本的姿勢を意識し学内演習に取り組んでいた。

「大変意識した」「意識した」と回答した学生の人間関係に関する気づきでは、コミュニケーションの基本的姿勢の視点からみると、患者の心を開く上で大切な【話を聴くことの意味】(傾聴)と【共感することの意味】(共感)、そして、信頼関係に影響する「誠実さ」や援助的な姿勢を示す「尊重」として【相手の思いに立つことの意味】など看護師役として意識的に捉えていることが明らかになった。

以下、カテゴリごとにその内容を検討したい。学生は患者役の【話を聴くことの意味】を『相手の立場がわかること』、『対象のことが常に考えられる』ことと捉えており、看護師役からの見方ではなく、患者役の立場から理解することが大切であると学んでいた。見藤(1998)は、患者に対応した適切な良い看護を行おうとするなら、患者の心の状態を正しく把握することから始めなければならない。患者がせつなく深いレベルの感情や感覚を表現してくれても看護師の側にそれをキャッチする能力がなければならぬと、聴くことを通じて対象を理解していくことの大切さを述べている。また学生は、聴くことによって、『相手が段々と心を開いてくれ、相手との距離が近くなった』と実感しており、これは「傾聴の姿勢

は相手にも伝わり、患者の心が開く重要な姿勢である」という村中(2001)の指摘と一致したものであった。さらに学生は、お互いに話しを聴くことで、患者役が看護師役を『頼りにしてくれている』、また、看護師役が患者役に『話しかける回数が増えることから、看護師役としてうれしい』と感じていた。人間関係は相互の関係で成立することから、相手との関係の成立が、頼りにされたと感じたり、うれしさにつながったりしたといえる。白井(1995)は、看護師が話しを聴くという姿勢が、相手との信頼感を生み出すとしている。学生の気づきも看護師役として聴くことを通じて、患者役との人間関係の中から気づいたものといえる。

次に、【共感することの意味】について学生は、患者役が安心して援助を受けられるだけでなく、お互いがリラックスできることを学んでいた。それは、『看護師役は、相手に共感することによって、安心する』『お互いリラックスできた』『雰囲気や和んだ』という学生の記載から、さらに、『共感を通してコミュニケーションがうまく取れる』『患者役との関係が近づけた』という記載からうかがえる。援助は、一方的な援助関係でないこと、相手に共感することで患者役との関係が近づくことを実感していた。

【相手の思いに立つことの意味】について学生は、相手の思いに立つことによって、患者役に対して、『どのようなことがされたくないのか理解でき、共感できるようになった』という気づきをしていた。これは、相手を尊重し相手の立場に立った姿勢でケアすることの意味に対する学びであるといえる。「患者役に接近し患者の願い、思いを教えてもらい患者と共に歩もうとする姿勢が、患者の思いに立った援助につながる」と見藤(1996)も述べている。援助は、相手との関係性の中で成り立つものであるから、看護師が一方的に援助しようと思っても、成立するものではないという看護のあり方につながる学びといえる。

【声かけの意味】では、声かけによって学生は、『患者役とコミュニケーションがとれる』ことや『技術練習直後、ねぎらいの言葉をかけたとき、患者役が落ち着いた感じであった』などと学んでいる。また、技術演習時、患者役のつらそうな様子に声をかけることによって『対象は力が抜けて穏やかになっていった』、緊張しているときは、対象に『声かけだけでも相手をリラックスできる』『痛みを最小限にする』などの気づきであった。看護師役は、患者役に声をかけることによって、患者役とのコミュニケーションのきっかけになったり、声かけによって落ち着いた感じになったと受け止められたり、相手の力が抜けて穏やかになったという学びであった。また、「ねぎらい」「穏やかに」「相手がリラックスできる」と記載していることから、これは単に、機械的に患者役

に声をかけるというのではなく、相手を気遣った声かけであったことがうかがえる。コミュニケーション能力が低下しているといわれている学生にとって、声かけの意味を実感できたことは、非常に意味ある学習といえる。

【患者役から話してもらうことの意味】や【相互関係の持つ意味】についての看護師役への気づきでは、患者役から話してもらうことによって、『看護師役も少し緊張がほぐれる』ことや『嫌な思いをしていないか意見を言ってもらいながら実施できる』という内容であった。また、看護師役が気づけなかったことを患者役から言われたことによって、『あっそうかと学んだ』など、援助は一方的なものではないという気づきがあった。これは、患者役から話しかけられると、看護師役も緊張がほぐれることを実感したり、時に患者役から学んだり、援助する関係は相互関係によって影響しあっていることへの学びであった(尾原, 2006)。

【看護師の基本的姿勢が学生の日常生活へ活用していることの意味】では、患者役は、コミュニケーションの基本的姿勢を意識することによって、学内演習以外の時間においても『普段話していない人とも実際、打ち解けたりできた』『日常的にも会話をするようになった』など学内の友達同士の人間関係にまで変化させていた。学内演習で体験したコミュニケーションの基本的姿勢が、日ごろの学生生活の中で、学生同士の人間関係を築く上で生かしていることがうかがえる。

2. コミュニケーションの基本的姿勢について、学内演習での体験を通して学ぶことの意味

学生のコミュニケーション能力の低下が、他者の立場への想像力の欠如につながることもある。実習では、受け持ち患者の意図や思いに気づけないばかりでなく、自己中心的な行動を取り、患者に不快な思いをさせる場面も時折りみられる。延近(2003)は、現代学生の状況として、学内での座学では生じない学生の傾向が本格的な実習に入って生じてくることがある。これは、座学においては、教師からの一方的なコミュニケーション形態であり、学生本人の本質的な問題に触れられずに済む。しかし、実習では幅広い年代の患者とコミュニケーションをとるため、今まで生活してきた中で経験しなかった人間関係に出会うことがひとつの要因であろうと述べている。また、藤崎(1998)は、看護基礎教育におけるコミュニケーション技術の授業方法について、知識の教育として、主に講義中心に行われる傾向にある。しかし、コミュニケーションは、精神運動領域の教育なのであるから、実習前に清拭や洗髪、ベッドメイキングをみっちり教育することと同程度にコミュニケーションに対しても教育が行われているか、問い直してみる必要性を指摘している。これらのことから、コミュニケーションの

基本的な姿勢は、講義のみで教えられて、できるようになるのではなく、学ぶ学生自身が主体になって自分の意志で体験的に学ぶものであると考える。見藤(1987)は、学びには自己の実感を手がかりとして主体的に関わっていく過程がどうしても必要である。機械的に知識を詰め込むような学びは役に立たぬばかりか害さえあるとしている。

今回の学習結果は、講義で学んだコミュニケーションの基本的姿勢について、学内演習で学生自らが実践してみたことで、看護師に必要な姿勢について、自分なりに実感でき、理解を深めたといえる。そして、これらの学びが、実習において、患者との人間関係を作る上で、手がかりになっていくものと考えられる。

VI. 結論

学内演習におけるロールプレイで、看護師役を担った学生が患者役の学生との関係性の中で、「気づいた内容」を取り出した結果、以下のことが明らかになった。

1. 学生は、相手の話を聴くことや共感することが対象理解につながることで、相手の思いに立つことが信頼関係につながることで、声をかけることが相互関係につながることで等の気づきを得ていた。
2. コミュニケーション能力を高める場を想定した学習方法として、学生同士のロールプレイを学内演習に組み入れていく有用性が示唆された。

おわりに

学内演習で看護師役としてコミュニケーションの基本的姿勢を用いたことにより、患者役との人間関係に気づきを得ていた。この学びは、今後、実習での患者との人間関係にも生かされていくものと考えられる。

今回、28名からの記述内容の分析であり、データの一般化までは及ばなかったが、今後、コミュニケーションの基本姿勢に対する学内演習の学びやそれらが臨地実習にどう反映していくのか追求していきたいと考える。

引用文献

- 藤崎和彦(1998): 模擬患者による医療者のコミュニケーション技能教育, 日本看護科学学会誌, 21(4), 68-71.
- 厚生労働省(2007.4): 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書.
- 見藤隆子: 人を育てる看護教育. 医学書院, 46 - 50, 1998, 東京.
- 村中陽子(2001): 看護実践に有効なコミュニケーション, 月刊ナーシング, 21(4), 34.

延近久子 (2003) : 臨床実習指導のプロモーション, ユリシス出版部, 38, 東京.

尾原喜美子 (2006) : 看護学生の関係行動づくり行動の変化, 日本看護研究学会誌, 29(5), 83-92.

太田博子 (2007) : 改正カリキュラムの視点と展望, 厚生労働

省看護研修センター講演会議録, 東京.

白井幸子 : 看護に生かす交流分析, 医学書院, 67-69, 1995, 東京.

Travelbee 著 / 長谷川浩他訳 (1975) : 人間対人間の看護, 医学書院, 25-45, 東京.